沈黙の闘い

The Silent Twins

もの言わぬ双子の少女の物語

マージョリー・ウォレス
Marjorie Wallace
島浩二・島式子訳

大和書房

江苏工业学院图书馆
藏书章

沈黙の闘い

The Silent Twins

もの言わぬ双子の少女の物語

マージョリー・ウォレス
Marjorie Wallace
島浩二・島式子訳

大和書房

島 浩二（しま・こうじ）
一九四七年京都生まれ
阪南大学教授
主な訳書――
M・J・ドーントン『公営住宅の実験』（ドメス出版）、G・クロシック『イギリス下層中産階級の社会史』（法律文化社）ほか。

島 式子（しま・のりこ）
一九四七年京都生まれ
甲南女子大学助教授
主な著書――
『児童文学はじめの一歩』（共著・世界思想社）、『セント・ニコラスの研究』（同朋社）ほか。

沈黙の闘い
――もの言わぬ双子の少女の物語
一九九〇年七月二五日　第一刷発行

著者――マージョリー・ウォレス
訳者――島浩二・島式子
発行者――大和和明
発行所――大和書房
東京都文京区関口一―三三―四　〒一一二
電話番号（二〇三）四五一一
振替　東京六―六四二二七
印刷所――暁印刷
製本所――小泉製本
装幀――高麗隆彦
©1990 Kouji Sima & Noriko Sima Printed in Japan
ISBN4-479-57004-7
乱丁・落丁本はお取替します

偉大な母ドリス・ウォレス・ハーウッドへ

謝辞

私は何よりもまず第一に、双子の両親であるオーブリ・ギボンズとグロリア・ギボンズ夫妻の勇気に心から感謝したい。ギボンズ夫妻は、自分たちが傷ついたり家族のプライヴァシーが侵されるのを気にかけることなく、終始一貫して私を信用し、手助けしてくれた。双子の娘たちの身の上に起こったことを余すところなく知ってもらいたいという、ギボンズ夫妻の強い決意がなければ、本書を最後まで書き上げることはとうてい不可能であった。

また、最初に双子を診断した教育心理学者のティム・トーマスの勇気と心配りにも深く感謝する。そもそも私が双子に関心をもつようになったのは、双子の将来に対して彼が示した深い憂慮がきっかけであったし、その後も、洞察力の乏しい同僚の非難のなかでときには職を失う危険まで冒しながら、私とギボンズ家の皆に対して彼はあらゆる援助を惜しまなかった。妻のスーザンと子ども達も数々の不愉快なことを経験したと思うが、最後まで彼の支えになった。

さらに、ハヴァフォドウエスト周辺の多くの人々、とりわけエヴァン・デイヴィーズ博士、双子の特別教師で私に論文を貸してくれたキャサリン・アーサー、双子についての資

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

料を見せてくれた警察官にも、たいへんお世話になった。

バクルチャーチ拘置センターの所長をはじめスタッフのみなさん、双子の弁護側の心理学者ウイリアム・スプライ博士、ブロードムア特別病院の責任者ジョーン・ハミルトン博士以下いく人かの医師・看護婦・ソーシャルワーカーの皆さんには、双子と面会し話を聞くうえで何かと便宜をはかってもらった。特に、私をジューンとジェニファーに引き合わせ、繰り返し面会するように激励してくれたボイス・ル・クトゥール博士、ブロードムアについての叙述をチェックしてくれたソーシャルワーカーのダグラス・ハンター氏には深く感謝したい。

双子の日記を書き換える仕事を手伝ってくれたメアリー・セネカルとフランシス・アングリスにも、感謝の言葉を述べたい。キム・バーンとサリー・ベイカーも同様である。

しかしとりわけお世話になったのはトム・マージェリスンである。彼の的確な判断、忍耐強さ、思いやりのおかげで、双子と格闘したこの三年間を私はなんとかもちこたえることができたように思う。

【沈黙の闘い】目次

はじめに ……9

第一章 幸せな家庭

家族なんてものは悲劇そのもので、悲惨の連続だ……。時々は愛をめぐって、けれど大抵は憎しみばかり。だからみんなが演技しているのが私には分る、ちょうどジグソーパズルのように家族みんながピタリとかみあい、理想的な家庭像を描くふりをしながら。

21

第二章 マネシツグミ

ただうなづくだけの方がずっと気が楽だ。言葉はあまりにも多くを語りすぎたから。もし私達が突然話しだしたら、みんなびっくり仰天したことだろう。

41

第三章 人形の家

十六歳の時わたしはまだ処女で、人形遊びをしていた。一人の友達もなく、わたしとジェニファーは人形の幸福だけを願って生きていた。

64

第四章 ガラスの町

あのころは青春時代で一番不安定な時期だった。Jと私はいつも口げんかし、退屈してやる気をなくし、欲求不満になり、頭に血が昇った。二人ともこんな風にして青春が過ぎていくのかと思っていた。

86

第五章 アメリカの夢

今思いかえせば、その年の夏に一番強烈に残ってるのは、愛と情熱と性の秘密を何もかも知ってしまったことだ。それはまるでキラキラした黄金の一筋の糸のように、私の心にとどまっている。自分の人生というものについてどうすべきかを考える機会が与えられたのだ。小さな子どもがキャンディをもぎとるように、私はそれにとびついた。

123

第六章 嵐のあと
Jと私は今孤独だ。広々して誰もいない、何もない場所に行きたい。自分では気づかぬうちに恋とセックスをひたすら求めたが、それはどこにもなかった。嵐が過ぎて元に戻り、今は新しい段階だ。Jと私はまた二人きりになった。休息が必要だった。
154

第七章 二人の戦争
誕生と同時に私の片われは死ぬべきだった。カインはアベルを殺した。双子に生まれた以上それを忘れることはできない。
187

第八章 私の影
私のように妹にひどい目にあわされている人はいまい。夫に苦しめられる。それならありうる。妻でも同じだ。子ども、そう、それもある。だが私のこの妹ときたら、私から太陽の光を盗んだ暗い影だ。私の一つの、たった一つの厄介者だ。
219

第九章 判決
秘密の地下社会では恐い人もいないし、隠れる必要もない。たくさんの人に囲まれた生活が始まるだろう。みんな私の友達になってくれるだろう。
256

第十章 地獄に咲く花
貧しくとも心地よい生活を無意味に堕落させた私の、何という愚かさよ。
292

訳者あとがき
329

沈黙の闘い

THE SILENT TWINS
by Marjorie Wallace

Copyright © 1986 by Marjorie Wallace
Japanese translation rights arranged with
Chatto and Windus Ltd., London
through Tuttle-Mori Agency Inc, Tokyo

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はじめに

窓から見えた
独りぼっちの小鳥さん
雪の中で震えてる
くちばしを固く閉じ、歌わない小鳥さん
私そっくり、誰も知らない

——ジューン・ギボンズ

ハヴァフォドウエストはありふれた小さな町で、丘にへばりつく家々が、まるで大昔の恐龍の背中の突起のようにごつごつとしていた。ここは、ペンブルック半島の西端に位置する西部ウェールズの中心地で、何世紀間もの曇りと雨の陰鬱な日々がしみついているかのようだ。古い町並みと新しい住宅地とがどんよりとした灰色の中にとけこんでいる。おまけにこの町は住民の心の中まで天候そっくりの印象を与えていた。人々は分りにくいなまりでボソボソしゃべり、心を貝のように固く閉ざしている。丘の頂きあたり、今ではもう使われなくなった競馬場と町との間に、戦後建てられた団地がある。それは寝室が二〜四部屋あるありふれた連棟住宅で、近くのブローディにある英国空軍基地勤務者の家族向けに建設されたものだ。そこの外壁についた汚れを一目みればひとが長年住んでいることが分るが、団地全体には仮住まいの趣が漂っている。どの庭も手入れが悪く、芝もまだらで木々も花もわずかしかない。

この連棟住宅の端、ファージー・パーク三十五番地に、この団地のなかでたった一組の黒人の家族、

ギボンズ一家が住んでいた。オーブリ・ギボンズは有能で社交的な感じのよい人物で、空軍基地の航空管制副官として働いていた。バルバドスを後にしてこの二十年、英国空軍での彼の仕事ぶりは地味だが堅実なものだった。妻のグロリアは四歳年上で、各地の英国空軍基地を転々とする夫とともに四人の子どもを育てあげた。幸福そのものの家庭であったが、隣近所と特別なつきあいはなかった。子どもたちはよく躾られて行儀もよい。ギボンズ一家にはこれといって特別なこともなく、平穏な日々をおくっていた。とりたてていうことは何もなかった、ただこの家族に双生児がいることを除いては。

ジューンとジェニファーは一卵性双生児だった（母親のグロリアは、双子が生まれようとは思ってもみなかったが）。この子ども達は小柄でかわいらしく、きりりとした顔立ちだった。二人はほとんどの時間を居間の階上の自分達の部屋で一緒に過ごし、十六歳になってもまだ人形遊びに興じ、おしゃべりし、ポップ・ミュージックのラジオやテープを聞いた。時々は薄化粧をし、ヘアー・スタイルを整えて町へ繰り出し、自分達の失業手当をためたお金で切手シートやペン、メモ帳、練習帳を買った。毎日、二人宛に手紙や大型茶封筒やジィフィー・バッグなどの郵便物がどっさり送られてきた。これを受けとるたびにグロリアは目を丸くした。一体双子の娘たちは何を企らんでいるのだろうか？

一科目しか卒業資格を取らずに学校を卒業すると、二人は自分たちの部屋に閉じ籠もり、誰にも笑いかけず、食事も家族と共にせず、家にいる気配すら感じさせなくなった。本当は、二人と家族の結びつきは強く、双子の側から愛情を間接的に示すこともあったが、面と向かっては表現しなかった。時には家族との接触も断えて、二人だけの秘密に没頭し、家族とはたまたま同じ宿をあてがわれた敵同士のようになっていった。日がたつにつれ、母親は二人がパジャマを着てベッドに寝ているところか、通信販売のカタログを見てせがまれたタイプ・ライターを夢中でたたいている姿しか見なくなった。ある日、鍵のかかった二人の部屋へ郵便物をもっていった時、グロリアは中身が知りたくてたまらなくなり、小

包みを開いて分厚い黄色のパンフレットを取り出した。『会話の技術』というタイトルを目にした時、信じられない思いで胸に熱いものがこみあげた。幼いころからジューンとジェニファーは誰とも話すことを拒んできた子ども達だったからである。オーブリとも、兄や姉とも、また母親である自分自身とも。グロリアは期待しては裏切られ、心労を重ねた歳月をふり返った。「二人とも……今度こそがんばるつもりなのね。」

私が初めてこの物言わぬ双子のことを耳にしたのは一九八二年の四月のことで、その時私はサンデー・タイムスの寄稿者としてこの二人の放火と窃盗に関する裁判についての記事を書いたのだった。取材が進むにつれてこの裁判の異様な側面が明らかになってきた。憔悴しきった小柄な二人はたまにつぶやくほかは一言もしゃべらなかったため、罪を認めたものと解釈されてしまった。決まりきった法廷劇が、当の二人を一切無視したように冷ややかに進められた。医者の証言、弁護士の反対尋問、最後に判決。全てが予定通り進められ、誰一人意図して二人を罪におとしいれようとしたものはなかった。が、裁判官は、ブロードムア特別病院に不定期隔離すべしとの判決を、恐怖におののく双生児に淡々と言い渡したのである。

この判決に私は強い衝撃を受け、二人について調べるためにその両親を訪ねたいと思ったのであった。父親のオーブリに双子の部屋へ案内された時、一気に手掛りが摑めたと思った。というのは、二人の部屋のドアを開けると、小さな部屋一杯に黒いゴミ袋があふれ、二段ベッドの上にも床にも、また家具という家具の上にも、積み上げられ散乱しているのが見えたからである。オーブリは一つの袋を開けた。なぐり書きや絵がいっぱいつまっていた。「警察に押収されていたのを、ちょうど取り戻してきたところです」と彼は言った。それは日記や書きかけの小説、短いお話に詩の原稿、絵をなぐり描きした紙片

やスケッチ帳などの、異様なまでのコレクションだった。オーブリの許しをもらって、私は黒いゴミ袋の山を車に積み、この宝物をロンドンへ持ち帰った。

この宝の山を調べていて、双子が十七歳の時、ジューンの最初の小説『ペプシ・コーラ中毒者』の出版費用に二人の失業保険を充てようとしていたことが分った。それ以来、ジューンは何十篇もの短篇小説や詩を書き、さらに新しい小説を三篇書き始めていたし、ジェニファーも三篇の短篇小説と数多くの随筆を書いていた。これらは、文章は下手でもエネルギーと感受性に満ち満ちていた。

しばらくして、ブロードムア病院の顧問精神科医、ル・クトゥール博士から電話をもらった。博士は私の記事を読んで、この双子に小説や詩を書く力をもう一度蘇らせるために助力を求めてこられたのだ。博士の考えでは、この子らの創造性を引き出すことができれば、周囲の人々と気持ちを通わすようになるのではないか、ということだった。私も同感だったので、この双子と面会することにした。そしてある日、私は落書きだらけのさびれたクロウソーン駅に降りたち、丘をのぼってブロードムア特別病院へと向かった。丘の頂きの周囲一帯は高さ四〇フィートのレンガ壁で囲まれ、まるで侵入者を拒むためではなく、中の住人をとじこめるための要塞都市のようだ。ここがイギリスで最も警戒厳重なことで知られる病院である。中には、運動場、プレハブの物置小屋、堅牢な病棟、ボイラー小屋、鉄柵つきのバルコニーと鉄格子のはまった窓のある老朽化した一戸建ての病棟がある。手入れのゆき届いた庭や菜園までもが高い壁で区切られている様子は、この丘の斜面にある連棟住宅と変わりない。しかしここはどこも錠前だらけなので、看護婦の腰では常に鍵がじゃらじゃらいっていた。五〇〇人の収容者の中には、強姦常習犯、幼児性犯罪者、毒殺犯、絞殺犯、放火犯、大量殺人犯などがいる。私は女性棟の面会者名簿に署名し、ついでに以前の面会者の名を見ようとページを繰りかけたが、すぐに咎められた。

私は気を静め、指示された通り十数人の面会者の列のうしろにならんだ。背の低い男が受付で妻に会

わせろとヒステリックに叫んでいた。面会はできないと言われると、男は入り口に立つ看護婦に向かって、丸一日かけてはるばるやってきたとくどくど説明していた。面会はできないと看護婦はもう一度くりかえした。ブルーの制服を着た女性が門を開けてんでバラバラの私達を面会室へ案内しはじめても、この言い争いはまだ終わりそうになかった。面会室には十数台の小テーブルと布張りの椅子が二脚ずつ置いてあった。この部屋の唯一の飾りといえば一台の展示ケースだけで、その中にはパステル・ピンクとブルーのリボンをつけたふわふわの熊の縫いぐるみとか、かわいらしいうさこちゃん、丸いびっくり眼のコアラ、スモックとボンネットをつけた縫いぐるみの人形などがならべてある。皮肉なことに、我が国でもっとも凶悪な男女の手になるとは思えないほどの無邪気な作品群である。

「ジューン・ギボンズです」と別の係員が知らせた。私は目をあげた。緊張で体をこわばらせた少女の両脇を二人の看護婦がかかえていたが、少女の様子はまるで棺桶そのものだった。身じろぎひとつせず、目を伏せ、その両腕は重たげに垂れ下がっている。顔はまるで能面のように無表情で、およそ生気という生気が抜け去ったようにみえた。テーブルの向かいに座らされ、二人の看護婦が数フィート離れたところに椅子を引きよせて私達の「会話」を聞きとろうとしていた。

しかし看護婦の耳に届いたことはほんのわずかだった。最初の十五分間で、ジューンという少女の心に私の言葉がまったく入り込んでいないことに気づいた。それにはかまわず私はしゃべり続けたが、しゃべればしゃべるほどその感を深くした。ジューンはここブロードムアに着いて以来一ヵ月、看護婦や医者にも、また言語治療士や他の収容者にたいしても一言もしゃべることはなかったのである。恐らく双子の姉妹のジェニファーとならしゃべっただろうが、ジェニファーはジューンと離れた棟に収容されて「集中治療」を受けていた。

魂の抜けがらのようなジューンとみすぼらしいテーブルをはさんで向かいあっていたその時、私には

この子と心を通わせることはまったく不可能に思えた。しかしジューンの書いたもののことを私が話し始めると、少女の目に輝きがかいま見え、口もとには微笑が浮かんだように見えた。それでもこの子の口から出るのはしわがれたつぶやきだけだった。魂全体がまるで、いまにも吠えんばかりの叫び声をあげようとしながら、話してはならぬという命令のようなものとのはざまできりきりまいしているかのようだった。ジューンはもどかしげに口を開こうとするたびに、何者かに首をしめつけられでもするかのように口をとじた。一体いかなる力がジューンをかくもがんじがらめにしているのだろう。この子に差しのべられるどんな助けや愛をも拒み通す強さは、一体どこに潜んでいるのか。将来性のある少女がバラ色の青春を棒にふって、隔離病棟に閉じこめられ、自分の裡にかたくなに閉じこもってしまったのは何故なのだろう。看護婦が連れ去るために近づいた時、ジューンは一瞬ではあったが、不本意な別れを半ば詫び、半ば楽しんでいるような眼差しで私を見た。賢そうな鋭い目つきで、皮肉な笑いさえ浮かべていた。私は殺人事件の真犯人をあげようと躍起になる探偵になったような気持ちだった。ただこの場合、殺された少女の「身体」は生きていて、犯人はジューンの心の中に潜んでいるのだ。

私はタールマック舗装の庭を横切って、当時ランカスター・ハウスとよばれていた棟へ、ジェニファーと会うために案内された。第一ランカスター・ハウスは女性用の「集中治療」棟で、共同生活できない者や、規則の緩やかな病棟では管理不能な者が収容されていた。階下の個室はマットレスを敷いただけで、施錠されているドアが多い。ジェニファーは、ジューンへの手紙をとり上げた看護婦になぐりかかったことがあり、そのためか常時保護観察中であった。病棟内では面会用の小部屋に入るまでにいくつもの錠のかかったドアを通ったが、そのたびに丹念に錠がかけられた。集中治療を受けている人は中央棟の面会室へ入ることが許されていないのである。

ジェニファーは背丈が二倍はありそうな看護婦二人に付き添われて現れ、テーブルの向かいに腰を下

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com